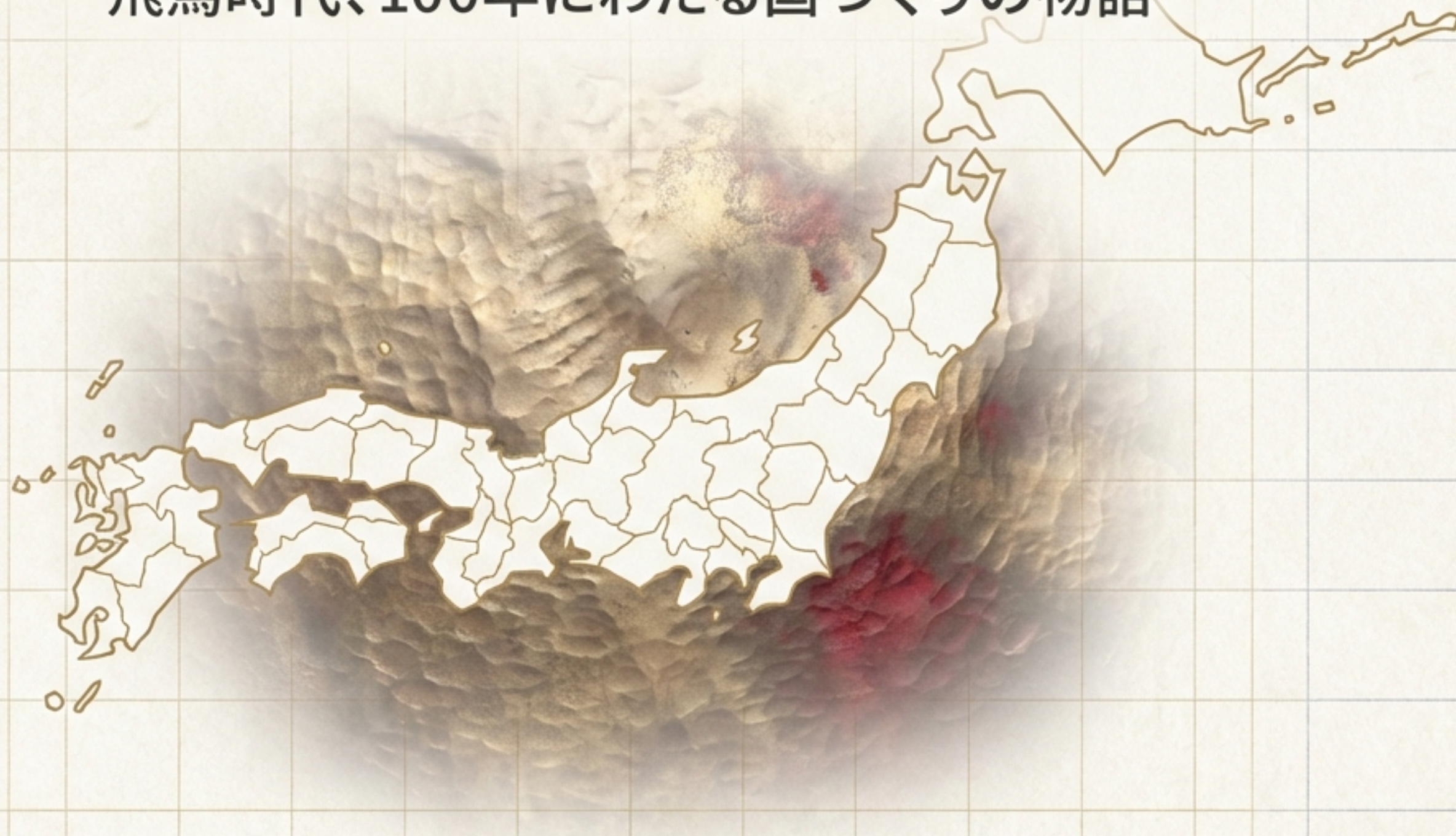


律令国家への道

飛鳥時代、100年にわたる国づくりの物語



なぜ、新しい国づくりが必要だったのか？

国内の課題

豪族、特に蘇我氏が政治を私物化し、
天皇の権力が不安定だった。



国外からの影響

当時の中国では、進んだ中央集権国家である「隋」が誕生。
日本は、隋から学び、対等な関係を築く必要があった。



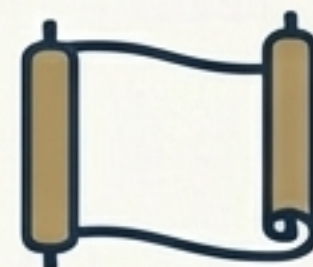
理想の設計図：聖徳太子のビジョン

推古天皇の摂政として、聖徳太子は天皇中心の国づくりを目指した。



冠位十二階

家柄ではなく、個人の能力や功績で役人を評価する制度。才能ある人材を登用。



十七条憲法

役人としての心構えを示した日本初の成文法。和を尊び、天皇の命令に従うことを説く。



遣隋使

小野妹子らを派遣し、隋の進んだ文化や制度を直接学ぶ。対等な外交を目指した。

仏教を厚く信仰し、法隆寺や四天王寺を建立。

設計図への抵抗：蘇我氏の専横

聖徳太子の死後、蘇我蝦夷・入鹿の親子が権力を独占。
政治の私物化は頂点に達し、天皇中心の国づくりは危機に瀕した。



蘇我蝦夷

権力を独占し、政治を私物化



蘇我入鹿



中大兄皇子

天皇中心の政治を取り戻す



中臣鎌足

旧体制の打破：乙巳の変（645年）

645年、中大兄皇子と中臣鎌足は、蘇我蝦夷・入鹿親子を討ち、蘇我氏の権力を終わらせた。この一連の政治改革を「大化の改新」と呼ぶ。

「大化の改新」

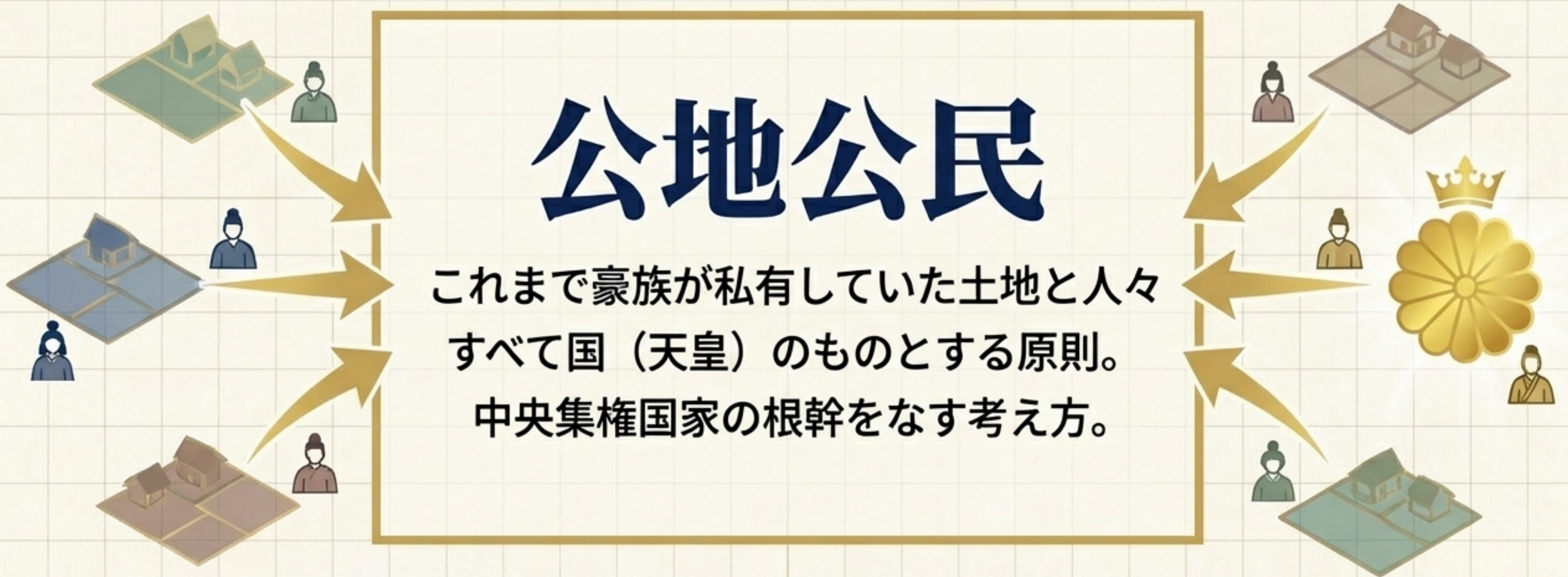
〔蘇我氏の専横〕 → 〔乙巳の変（645）〕 → 〔大化の改新〕

新しい国の土台：公地公民の原則

大化の改新後、天皇を中心とした国づくりの基本方針が定められた。

公地公民

これまで豪族が私有していた土地と人々
すべて国（天皇）のものとする原則。
中央集権国家の根幹をなす考え方。



新しい経済システム：班田収授法

公地公民の原則に基づき、土地と税の新しい仕組みが作られた。



この班田収授法によって、国家は民衆を直接支配し、安定した税収を得ることを目指した。

国家の試練①：白村江の戦いと外交の変化

中大兄皇子（後の天智天皇）は、滅亡した百済を助けるため朝鮮半島に出兵。



結果：

- 新羅が朝鮮半島を統一。
日本は大きな脅威を感じ、国防を強化。
- 遣唐使の航路が危険な南路に変更され、遭難が多発した。

国家の試練②：壬申の乱と天皇の権力

天智天皇の死後、後継者をめぐって息子の大友皇子と弟の大海人皇子が対立。
古代最大の内乱「壬申の乱」が勃発した。



- 争いに勝利した大海人皇子が、天武天皇として即位。
反対勢力を一掃し、天皇の権力を絶大なものにした。
- 天武天皇と、その妻である持統天皇は、天皇中心の政治をさらに強力に推し進めた。

100年の集大成：大宝律令の完成

The Final Steps:

天武・持統天皇の方針を受け継ぎ、国家の仕組みづくりは最終段階へ。
日本初の流通貨幣である富本銭の発行なども行われた。



大宝律令

701年



The Achievement (701年):

藤原不比等らが中心となり、中国の律令制度を基にした本格的な法典「大宝律令」を完成させた。

Significance:

これにより、天皇を頂点とする政治の仕組みが法的に完成し、日本は「律令国家」となった。

飛鳥時代・重要キーワード総まとめ



この100年の流れが、次の奈良・平安時代へとつながっていく。